

「田植今昔」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

五月の中旬ともなると宇都宮近辺の田植がほぼ終わったことと思う。田植の機械化が進むにつれ田植の時期が手植えの頃よりも一カ月ほど早まった。田植をさつさと済ませ他の農作業や農作業以外の仕事にとりかかるとためである。

我が国での農業の機械化が進められたのは、昭和三十一年後半からで高度経済発展期と重なる。水田稲作でいえば、まず馬耕に代わり耕運機が導



手植え時代の田植え
(篠井町昭和48年)

入され、ついで田植え機、稲刈り機、稲刈り脱穀機等が導入された。また耕運機や田植え機、稲刈り機等も当初は手押しだったが、その後乗用が普及した。

乗用の田植え機が使用されるようになった現在、家族四人で、一町歩ほどの水田でも楽に一日で植え終わる。総勢十人程で二三日もかかったかつての田植えが嘘のようである。

一方、高度経済発展期になると、農業外に収入を求め兼業農家が増大した。小規模の水田稲作農家では、年寄り夫婦が農業を営む家が増え、田植えは他所に勤務する子どもの休日に行う家が多くなった。今や五月連休は、田植えの恰好な時期でもある。

このように田植えは大きく様変わりしたが、次に手植えの時代の田植えの様子と田植えにまつわる風習について述べたい。

手植えの時代の田植の時期

は、宇都宮辺りでは六月半ばであった。サツキの花が盛りとなる頃である。当時の農作業は、自然に頼るところが大きく、梅雨に入ってから田に水が満たされ、また、苗を育てる苗代の水が温む五月になつて種をまき、苗が大きくなる六月にならなければ田植えとならなかつたのである。

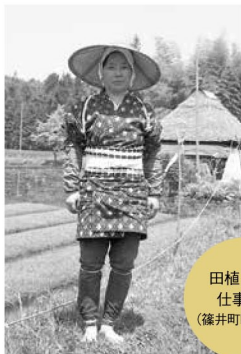
田植は一家総出で、その上隣近所の手伝いや早乙女等と呼ばれる日雇い労働者を依頼する等大勢して行ったものである。手伝いによる相互扶助を結びといった。結いは単なる相互扶助ではない。必ず同等の量で労働力を返すのが義務であり、万一借りた家で支障が生じた場合には、人を雇つても返したものである。一方、早乙女は結い不足する労力を補うために賃金で雇った植え手である。

田植えは、もともと田の神様の祭りとされ、鎌倉・室町時代には、着飾った植え手の女たちの回りを男たちが笛や太鼓で囃子たて賑やかに行った。手植えの時代の田植えには、そうした田の神様の祭りの名残が見られた。植え手の女性は、普段とは異

なつたござつぱりとした仕事着を着用したものであり、特に若嫁は真新しい仕事着に茜タスキに菅の笠を被り着飾った。また、どこの家でも赤飯を蒸かし、芋煮しめ、モロやニシンの煮つけ、煮豆等「馳走を作つたもので、赤飯が蒸かしあがると重箱に入れ、手伝いに来てくれた家に持つていく気配りも欠かせなかつた。

田植えには歌がつきものだった。俗に「野州田植え歌」と称し、田植え開始の頃は「富士の白雪朝日にとける」とけて流れて三島にそそぐ」の歌詞を歌い、疲れが出る午後になると「棒様坊様名ばかりの坊様魚食へたべお女郎と寝たり」といった疲れをいやす笑いを誘う歌詞を歌つたものである。

このように手植え時代の田植えには、さまざまな風習を伴つたもので、「田植え文化」が花開いた。稲作の中で田植えが最も大事な作業であつたからこそである。



田植え時の仕事着姿
(篠井町昭和48年)